

## 夏が来た。沈黙の夏だった。

k. n

アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンは、1907年にアメリカのペンシルバニア州で生まれました。

2007年には生誕100年ということで記念の講演会や写真展が各所で開催されました。そして彼女の影響力は今もなお生きつづけており、今日の環境問題取組みの原動力となっているように思えます。

レイチェル・カーソンの著書「**Silent Spring**」(沈黙の春)は、次のような文章で始まります。

「自然は沈黙した。鳥たちはどこ行ってしまったのか。みんな不思議に思い不吉な予感におびえた。春が来たが、沈黙の春だった」。

食糧増産のために使用した農薬が生態系を狂わし、その結果「春になっても花は咲かず、鳥は鳴かなくなった」ということで、農薬等の多用による自然破壊に警鐘を鳴らし、1960年代の化学万能の世界に、衝撃を与えました。

人間の科学技術の力により、豊かな暮らし、繁栄をめざした結果、思わぬ副作用にさいなむという筋書きです。

ところで、私の住んでいる横須賀の湘南鷹取では、2007年、8月になるのに蝉の声が殆どきこえませんでした。どうしたのでしょうか。

空梅雨で地面が乾燥しているからでしょうか。

確かに、我家の庭の草花は、雨が降らないので、枯れる一歩手前です。

化学製品は、役に立っている反面、危険性を併せ持つことがあり、1992年の地球サミットのアジェンダ21(行動計画)では、有害物質の適正管理に関して企業の自主的取組が要請され、日本でも有害化学物質の規制が始まりました。また化学関連業界では、自主的に「レスポンシブル・ケア」に取り組んでいます。

その地球サミットのちょうど30年前にレイチェルカーソンが「沈黙の春」、そして18年前に有吉佐和子が「複合汚染」を発表し、世界へ、そして日本中へ化学物質の有害性に警鐘を鳴らしたのです。



レイチェル・カーソン

今日、異常気象や地球温暖化という環境問題への関心が高まっています。なぜ地球の気温は上昇しているのだろうか？なぜ台風やハリケーンそして竜巻がこんなにも発生するのだろうか？

## 5号—2

IPCC(気候変動に関する政府間パネル)では、2007年第4次評価報告書で、地球温暖化の原因は、温室効果ガスによるということをはぼ断定しました。

また高排出シナリオでは、地球の平均気温は、2100年には2.4℃~6.4℃上昇するという試算を発表しました。このIPCCの活動に対し、2007年ノーベル平和賞が与えられました。そのIPCCの議長であるパチャウリ氏の話しを聞く機会がありました。そこでは、「低炭素社会をめざし、今こそ人類は手を打たなければ」ということを強く訴えていました。



パチャウリ IPCC議長

しかし、このような動きに対しいろいろ異論を唱える人もいます。中部大学のT教授や横浜国立大学のI教授などは、異論を本にして、ベストセラーになっています。

しかし今、本当に確信もって温暖化の原因を言い切ることができる人はいるのでしょうか。できないので世界の知恵を集めたIPCCでも完全断定をしていないのです。

過去に、環境問題は沢山発生しました。もう少し早く国や自治体、企業が手を打てば、被害を最小限に食い止められたというものばかりです。本当の原因究明に時間がかかっても「疑わしいものにはすぐ手を打つ」ことが、環境問題には肝要と思われま

す。1978年アメリカのナイヤガラフォール市で発生したラブカナル事件(化学工場廃棄物埋め立て物から有害物質が流出し、住民が避難)では、汚染責任者の特定に時間がかかり過ぎたので、特定するまでの間の浄化はEPA(アメリカ環境保護庁)が実施し、浄化費用は信託基金により浄化を行うことになり、スーパーファンド法が制定されました。

同じように、地球温暖化の原因は、更に時間をかけて究明すべき課題ですが、CO<sub>2</sub>等の温室効果ガス削減は、枯渇性化石燃料の節約にも繋がります。化石燃料節約を推し進めることに異論を唱える人は、まずいないでしょう。

我々は、過去の人たちから大切な環境・資源を引き継いだのですが、それを贈り物と考え、どんどん使ってはいけないのです。

地球誕生以来46億年の歴史で育まれた資源は預かりものとして、できれば利息をつけて次の世代にバトンタッチしなければならないのです。しかしバトンタッチしなければいけない襷たすきもだんだん細く弱くなり、もうじき擦り切れてなくなりそうです。

温暖化の原因は、異論はあっても、省資源、省エネルギーを推し進め、結果として地球温暖化にも歯止めがかかるということを、皆が認識し行動すること。これは大変難しい命題ですが、今求められています。

その意味では、都市計画や建築の開発・設計は、その業務を通じて大変大きな影響を及ぼすことができます。

まずすべてに優先して、環境を主題として検討を進めることが必要だと思っています。

数年前 ISO の環境マネジメントシステムの審査で、福井県のある建設会社の施工中の現場に行きました。その建物は隈研吾の設計でした。

ちょうど審査の少し前に、隈研吾氏の講演会で、話を聞いたあとでした。そこで感じたのは、「隈さんもずいぶん変わったな」ということです。福井県で施工中の建物は、木の素材を生かした「弱い建築」でした。

世田谷の環境八号道路沿いの「M2」の強い建築への思い入れは、時代と共に変わったのです。その変化は私にはとても良い変化と感じられました。

しかし、建築が社会的資産である以上、変わってはいけない基盤と基準があるはずで。

それは「素材や自然環境、そして自然のちからを大切にしたりやさしいつくり」、「長くいき続ける建築」と今は感じています。

